

Contents

1	初めての駅	2
2	窓際のトットちゃん	4
3	新しい学校	9
4	気に入ったわ	10
5	校長先生	12
6	お弁当	16
7	今日から学校に行く	18
8	電車の教室	21
9	授業	23

Chapter1 初めての駅

じゆう おか えき おおいまちせん お
自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手を引っ張って、
かいさつぐち で
改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。

そこで、かいさつぐちのおじさんに、「このきっぷ、もらっちゃいけない？」と聞いた。おじさんは「ダメだよ」というと、トットちゃんの手から、きっぷとあ
改札口の箱にいっぱい溜まっている切符をさして聞いた。「これ、ぜんぶ、おじさんの？」おじさんは、ほかでいひときっぷ
他の出て行く人の切符をひったくりながら答えた。「おじさんのじゃないよ、えき
駅のだから」「へーえ……」トットちゃんは、みれん
未練がましく、はこ
箱を覗き込みながら言った。「わたしおとな
私、大人になったら、きっぷうひと
切符を売る人になろうと思うわ」おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。「うちの男の子も、えきはたら
駅で働きたいって、いってるから、いっしょにやるといいよ」

トットちゃんは、すこはな
少し離れて、おじさんを見た。おじさんはふと
肥っていて、めがね
眼鏡をかけていて、よくみると、やさしそうなのところもあった。「ふん……」トットちゃんは、手
を腰に当てて、かんさつ
観察しながら言った。「おじさんとこのこ
子と、いっしょ
一緒にやってもいいけど、かんが
考えとくわ。あたし、これからあたらしい
新しい学校に行くんで、忙しいから」そういうと、トットちゃんは、ま
待ってるママのところに走っていった。そして、こうさけ
叫んだ。「わたし
私、きっぷや
切符屋さんになろうと思うんだ！」ママは、おどろ
驚きもしないで、いった。「でも、スパイ
になるって言ってたのは、どうするの？」

トットちゃんは、ママにてと
手を取られてあるだ
歩き出しながら、かんが
考えた。(そうだわ。きのう
までは、ぜったい
絶対にスパイになろう、って決めてたのに。でも、いまのきっぷ
切符をいっぱい箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ)「そうだ！」トットちゃんは、いい
ことを思いついて、ママのかお
顔をのぞきながら、おおごえ
大声をはりあげていった。「ねえ、ほんとう
本当はスパイなんだけど、きっぷや
切符屋さんなのは、どう？」ママはこた
答えなかった。

ほんとう
本当のことを言うと、ママはとてもふあん
不安だったのだ。もし、これから行くいしょうがっこう
小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。ちい
小さいはな
花のついた、フェ

ルトの帽子をかぶっている、ママの、きれいな顔が、少しまじめになった。そして、道を飛び跳ねながら、何かを早口でしゃべってるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったから、顔があうと、うれしそうに笑っていった。「ねえ、私、やっぱり、どっちもやめて、チンドン屋さんになる！！」ママは、多少、絶望的な気分と言った。「さあ、遅れるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、おしゃべりしないで、前を向いて、歩いてちょうだい」二人の目の前に、小さい学校の門が見えてきた。

Chapter2 窓際のトットちゃん

あたらしい学校^{がっこう}の門^{もん}をくぐる前^{まえ}に、トットちゃん^{ねん}のママが、なぜ不安^{ふあん}なのかを説明^{せつめい}すると、それはトットちゃんが、小学校^{しょうがっこう}一年^{ねん}なのにかかわらず、すでに学校^{がっこう}を退学^{たいがく}になったからだった。一年生^{いちねんせい}で!!

つい先週^{せんしゅう}のことだった。ママはトットちゃん^{ねん}の担任^{たんになん}の先生^{せんせい}に呼ばれて、はっきり、こういわれた。

「お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんがいると、クラス^{じゅう}中の迷惑^{めいわく}になります。よその学校^{がっこう}にお連れください!」若くて美しい女^{わか うつく おんな}の先生^{せんせい}は、ため息^{いき}をつきながら、繰り返し^{く かえ}返した。「本当に困^{こま}ってるんです!」ママはびっくりした。(一体^{いったい}、どんなことを……。クラス^{じゅう}中の迷惑^{めいわく}になる、どんなことを、あの子^こがするんだろうか……)

先生^{せんせい}は、カールしたまつ毛^げをパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻^{みじか うちまき}の毛^けを手でなでながら説明^{せつめい}に取り掛^とかった。

「まず、授業^{じゅぎょう}中に、机^{つくえ}のフタを、百ぺんくらい、あけたり閉めたりするんです。そこで私^{わたし}が、用事^{ようじ}がないのに、開けたり閉めたりしてはいけませんと申しますと、お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんは、ノートから、筆箱^{ふでばこ}、教科書^{きょうかしよ}、全部^{ぜんぶ}を机^{つくえ}の中にしまっけてしまっけて、一つ一つ取り出すんです。たとえば、書き取り^{かきと}をしますとしますね。するとお嬢^{じょう}さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン! とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭^あを中^{あた}につっこんで筆箱^{ふでばこ}から“ア”を書いための鉛筆^{えんぴつ}を出すと、急いで閉めて、“ア”を書きます。ところが、うまく書けなかったり間違えたりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭^あを突っ込んで、消しゴム^{け ごむ}をだし、閉めると、急いで消しゴム^{け ごむ}を使い、次に、すごい早さ^{はや}で開けて、消しゴム^{け ごむ}をしまっけて、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見てますと、“ア”ひとつだけ書いて、道具^{どうぐ}をひとつひとつ、全部^{ぜんぶ}しまっけてしまいます。鉛筆^{えんぴつ}をしまい、閉めて、また開けてノート^しをしまっけて……というふうに。そして、次の“イ”^{つぎ}のときに、また、ノートから始^{はじ}まって、鉛筆^{えんぴつ}、消しゴム^{け ごむ}……その度^{たび}に、私^{わたし}の目の前^{め まえ}で、目まぐるしく、机^{つくえ}のフタが開いたり閉まったり。私^{わたし}、目^めが回るんです。でも、一応^{いちおう}、用事^{ようじ}があるんですから、

いけないとは申せませんが……」先生のまつ毛が、その時を思い出したように、パチパチと早くなった。

そこで聞いて、ママには、トットちゃんが、なんで、学校の机を、そんなに開けたり閉めたりするのか、ちょっとわかった。というのは、初めて学校に行き帰ってきた日に、トットちゃんが、ひどく興奮して、こうママに報告したことを思い出したからだ。「ねえ、学校って、すごい。家の机の引き出しは、こんな風に、引っ張るのだけど、学校のはフタが上にあがるの。ゴミ箱のフタと同じなんだけど、もっとツルツルで、いろんなものが、しまえて、とってもいいんだ！」ママには、今まで見たことのない机の前で、トットちゃんが面白がって、開けたり閉めたりしてる様子が目に見えるようだった。そして、それは、(そんなに悪いことではないし、第一、だんだん馴れてくれば、そんなに開けたり閉めたりしなくなるだろう)と考えたけど、先生には、「よく注意しますから」といった。ところが、先生には、それまでの調子より声をもうすこし高くして、こういった。「それだけなら、よろしいんですけど！」ママは、すこし身がちぢむような気がした。先生は、体を少し前にのり出すといった。「机で音を立ててないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと！」ママは、またびっくりしたので聞いた。「立ってるって、どこにでございましょうか？」先生はすこし怒った風にいった。「教室の窓のところですよ！」ママは、わけが分からないので、続けて質問した。「窓のところで、何をしてるんでしょうか？」先生は、半分、叫ぶような声で言った。「チンドン屋を呼び込むためです。」

先生の話を、まとめて見ると、こういうことになるらしかった。一時間目に、机をパタパタを、かなりやると、それ以後は、机を離れて、窓のところに立って外を見ている。そこで、静かにしてしてくれるのなら、立っててもいい、と先生が思った矢先に、突然、トットちゃんは、大きい声で「チンドン屋さん！」と外に向かって叫んだ。だいたい、この教室の窓というのが、トットちゃんにとっては幸福なことに、先生にとっては不幸なことに、1階にあり、しかも通りは目の前だった。そして境といえ、低い、生垣があるだけだったから、トットちゃんは、簡単に、通りを歩いてる人と、話ができるわけだったのだ。さて、通りかかったチンドン屋さんは、呼ばれたか

ら教室の下まで来る。するとトットちゃんは、うれしそうに、クラス中の皆に呼びかけた。「来たわよー」。勉強してたクラス中の子供は、全員、その声で窓のところに、詰め掛けて、口々に叫ぶ。「チンドン屋さん」。すると、トットちゃんは、チンドン屋さんに頼む。「ねえ、ちょっとだけで、やってみて？」学校のそばを通る時は、音をおさえめにしているチンドン屋さんも、せっかくの頼みだからというので盛大に始める。クラスネットや鉦や太鼓や、三味線で。その間、先生がどうしてるか、といえ
ば、一段落つくまで、ひとり教壇で、ジーっと待ってるしかない。(この一曲が終わるまでの辛抱なんだから)と自分に言い聞かせながら。

さて、一曲終わると、チンドン屋さんは去って行き、生徒たちは、それぞれの席にもどる。ところが、驚いたことに、トットちゃんは、窓のところから動かない。「どうして、まだ、そこにいるのですか？」という先生の問いに、トットちゃんは、大真面目に答えた。「だって、また違うチンドン屋さんが来たら、お話しなきゃならないし。それから、さっきのチンドン屋さんが、また、戻ってきたら、大変だからです。」

「これじゃ、授業にならない、ということが、おわかりでしょう？」話してるうちに、先生は、かなり感情的になってきて、ママに言った。ママは、(なるほど、これでは先生も、お困りだわ)と思いかけた。とたん、先生は、また一段と大きな声で、こういった。「それに……」ママはびっくりしながらも、情けない思い出先生に聞いた。「まだ、あるんでございましょうか……」先生は、すぐいった。「“まだ”というように、数えられるくらいなら、こうやって、やめていただきたい、とお願いはしません!!」それから先生は、少し息を静めて、ママの顔を見て言った。「昨日のことですが、例によって、窓のところに立っているのも、またチンドン屋だと思って授業をしておりましたら、これが、また大きな声で、いきなり、『何してるの?』と、誰かに、何かを聞いているんですね。相手は、私のほうから見えませんが、誰だろう、と思っておりますと、また大きな声で、『ねえ、何をしてるの?』って。それも、今度は、通りにでなく、上のほうに向かって聞いてるんです。私も気になりまして、相手の返事が聞こえるかした、と耳を澄ましてみましたが、返事がないんです。お嬢さんは、それでも、さかんに、『ねえ、何してるの?』を続けるので、授業にもさしさわりがあるので、窓のと

ころに行^いって、お嬢^{じょう}さん^{はな}の話^{あいて}しかけてる相手^{だれ}が誰^みなのか、見てみようと思^{おも}いました。
窓^{まど}から顔^{かお}を出^だして上^{うへ}を見^みましたら、なんと、つばめが、教室^{きょうしつ}の屋根^{やね}の下^{した}に、巣^すを作^{つく}っているんです。その、つばめに聞^きいてるんですね。そりゃ私^{わたし}も、子供^{こども}の気持^{きも}ちが、分^わからないわけじゃありませんから、つばめに聞^きいてることを、馬鹿^{ばか}げている、とは申しません。授業^{じゅぎょう}中^{ちゅう}に、あんな声^{こえ}で、つばめに、『何^{なに}をしてるのか?』と聞^きかなくてもいいと、私^{わたし}は思^{おも}うんです」そして先生^{せんせい}は、ママが、一体^{いったい}なんとお詫^わびをしよう、と口^{くち}を開^あきかけたのより、早^{はや}く言^いった。「それから、こういうことも、ございました。初^{はじ}めての図画^{ずが}の時間^{じかん}のことですが、国旗^{こっき}を描^{えが}いて御覧^{ごらん}なさい、と私^{わたし}が申しましたら、他^{ほか}の子^こは、画用紙^{がようし}に、ちゃんと日^ひの丸^{まる}を描^{えが}いたんですが、お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんは、朝日新聞^{あさひしんぶん}の模^もようのような、軍艦旗^{ぐんかんき}を描^{えが}き始めました。それなら、それでいい、と思^{おも}ってましたら、突^{とつ}然^{ぜん}、旗^{はた}の周^{まわ}りに、ふさを、つけ始め^{はじ}めたんです。ふさ。よく青年団^{せいねんだん}とか、そういった旗^{はた}についてます。あの、ふさです。で、それも、まあ、どこかで見^みたのだろうから、と思^{おも}っておりました。ところが、ちょっ^めと目^めを離^{はな}したキスに、まあ、黄色^{きいろ}のふさを、机^{つくえ}にまで、どん^{えが}どん描^{えが}いちゃってるんです。だいたい画用紙^{がようし}に、ほぼいっばいに旗^{はた}を描^{えが}いたんですから、ふさの余^よ裕^{ゆう}は、もともと、あまりなかつたんですが、それに、黄色^{きいろ}のクレヨンで、ゴシゴシふさを描^{えが}いたんですね。それが、はみ出^だしちゃって、画用紙^{がようし}をどかしたら、机^{つくえ}に、ひどい黄色^{きいろ}のギザギザが残^{のこ}ってしまっ^て、ふいても、こすっても、とれません。まあ、幸^{さい}いなことは、ギザギザが三^{さん}方^{ほう}向^{こう}だけだった、ってことでしょうか？」ママは、ちぢこまりながらも、急^いいで質^{しつ}問^{もん}した。「三^{さん}方^{ほう}向^{こう}っていうのは……」先生^{せんせい}は、そろそろ疲^{つか}れてきた、という様子^{ようす}だったが、それでも親^{しん}切^{せつ}にい^はった。「旗^{はた}竿^{ざお}を左^{ひだり}はじに描^{えが}きましたから、旗^{はた}のギザギザは、三^{さん}方^{ほう}だけだったんでございます」ママは、少^{すこ}し助^{たす}かった、と思^{おも}って、「はあ、それで三^{さん}方^{ほう}だけ……」とい^はった。すると、先生^{せんせい}は、次^{つぎ}に、と^とっても、ゆ^くっくりの口^{くちよう}調^{てい}で、一^{ひと}言^{こと}づつ区^く切^ぎって「た^かだし、その代^{はた}わり、旗^{はた}竿^{ざお}のはじが、やはり、机^{つくえ}に、はみ出^だして、残^{のこ}っております!!」それから先生^{せんせい}は立^たち上^あがると、かなり冷^{つめ}たい感^{かん}じで、とどめをさすように言^いった。「それと、迷^{めい}惑^{わく}しているのは、私^{わたし}だけではござい^とません。隣^{となり}の一年生^{いちねんせい}の受^うけ持^もちの先生^{せんせい}もお困^{こま}りのことが、あるそうですか
ら……」ママは、決^{けつ}心^{しん}しないわけには、い^たしなかつた。(確^{ほか}かに、これ^{せい}じゃ、他^との生徒^{せいと}

さんに、ご迷惑^{めいわく}すぎる。どこか、他の学校^{ほかに がっこう さが}を探して、移^{うつ}したほうが、よさそうだ。何とか、あの子^この性格^{せいかく}がわかっていただけて、皆^{みな}と一緒^{いっしょ}にやっ^{おし}ていくことを教えてくださるような学校^{がっこう}に……) そうして、ママが、あっちこっち、かけずりまわって見^みつけたのが、これから行^いこうとしている学校^{がっこう}、というわけだったのだ。ママは、この退学^{たいがく}のことを、トットちゃんに話^{はな}していなかった。話^{はな}しても、何^{なに}がいけなかったのか、わからないだろうし、また、そんなにことで、トットちゃんが、コンプレックスを持^もつのも、よくないと思^{おも}ったから、(いつか、大き^{おお}くなったら、話^{はな}しましょう) と、きめていた。ただ、トットちゃんには、こうい^いった。「新^{あた}しい学校^{がっこう}に行^いってみない? いい学校^{がっこう}だって話^{はなし}よ」トットちゃんは、少^{すこ}し考^{かんが}えてから、言^いった。「行^いくけど……」ママは、(この子^こは、今何^{いまなに}を考^{かんが}えてるのだろうか) と思^{おも}った。(うすうす、退学^{たいがく}のこと、気^きがついていたんだらうか……) 次^{つぎ}の瞬^{しゅん}間^{かん}、トットちゃんは、ママの腕^{うで}の中^{なか}に、飛^とび込^こんで来^きて、い^いった。「ねえ、今度^{こんど}の学校^{がっこう}に、いいチンドン屋^やさん、来^くるかな?」とにかく、そんなわけ^{わけ}で、トットちゃんとママは、新^{あた}しい学校^{がっこう}に向^むかって、歩^{ある}いているのだった。

Chapter3 新しい学校

学校の門が、はっきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止った。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きく書いてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。

「地面から生えてる門ね」

と、トットちゃんはママに言った。そうして、こう、付け加えた。

「きっと、どんだんはえて、今に電信柱より高くなるわ」

確かに、その二本の門は、根っこのある木だった。トットちゃんは、門に近づくと、いきなり顔を、斜めにした。なぜかといえば、門にぶら下げてある学校の名前を書いた札が、風に吹かれたのか、斜めになっていたからだった。

「トモエがくえん」トットちゃんは、顔を斜めにしたまま、表札を読み上げた。そして、ママに、

「トモエって、なあに？」

と聞こうとしたときだった。トットちゃんの目の端に、夢としか思えないものが見えたのだった。トットちゃんは、身をかがめると、門の植え込みの、隙間に頭を突っ込んで、門の中をのぞいてみた。どうしよう、みえたんだけど！

「ママ！ あれ、本当の電車？ 校庭に並んでるの」

それは、走っていない、本当の電車が六台、教室用に、置かれてあるのだった。トットちゃんは、夢のように思った。“電車の教室……”

電車で窓が、朝の光を受けて、キラキラと光っていた。目を輝かして、のぞいているトットちゃんの、ホッペタも、光っていた。

Chapter4 気に入ったわ

次の瞬間、トットちゃんは、「わーい」と歓声を上げると、電車の教室のほうに向かって走り出した。そして、走りながら、ママに向かって叫んだ。

「ねえ、早く、動かない電車に乗ってみよう!」

ママは、驚いて走り出した。もとバスケットボールの選手だったママの足は、トットちゃんより速かったから、トットちゃんが、後、ちょっとでドア、というときに、スカートを捕まえられてしまった。ママは、スカートのはしを、ぎっちり握ったまま、トットちゃんにいった。

「ダメよ。この電車は、この学校のお教室なんだし、あなたは、まだ、この学校に入れていただいてないんだから。もし、どうしても、この電車に乗りたかったら、これからお目にかかる校長先生とちゃんと、お話してちょうだい。そして、うまくいったら、この学校に通えるんだから、分かった?」

トットちゃんは、（今乗れないのは、とても残念なことだ）と思ったけど、ママのいう通りにしようときめたから、大きな声で、

「うん」

といって、それから、いそいで、つけたした。

「私、この学校、とっても気に入ったわ」

ママは、トットちゃんが気に入ったかどうかより、校長先生が、トットちゃんを気に入ってくださるかどうかが問題なのよ、といたい気がしたけど、とにかく、トットちゃんのスカートから手を離し、手をつないで校長室のほうに歩き出した。

どの電車も静かで、ちょっと前に、一時間目の授業が始まったようだった。あまり広くない校庭の周りには、塀の変わりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。

校長室は、電車ではなく、ちょうど、門から正面に見える扇形に広がった七段くらいある石の階段を上った、その右手にあった。

トットちゃんは、ママの手を振り切ると、階段を駆け上がって行ったが、急に止まっ

て、振り向いた。だから、後ろから行ったママは、もう少しで、トットちゃんと正面衝突するところだった。

「どうしたの？」

ママは、トットちゃんの気が変わったのかと思って、急いで聞いた。トットちゃんは、ちょうど階段の一番うえに立った形だったけど、まじめな顔をして、小声でママに聞いた。

「ねえ、これからあいに行く人って、駅の人なんじゃないの？」

ママは、かなり辛抱づよい人間だったから……というか、面白がりやだったから、やはり小声になって、トットちゃんに顔をつけて、聞いた。

「どうして？」

トットちゃんは、ますます声をひそめて言った。

「だってさ、校長先生って、ママいったけど、こんなに電車、いっぱい持ってるんだから、本当は、駅の人なんじゃないの？」

確かに、電車の払い下げを校舎にしている学校なんてめずらしいから、トットちゃんの疑問も、もっとものこと、とママも思ったけど、この際、説明してるヒマはないので、こういった。

「じゃ、あなた、校長先生に伺って御覧なさい、自分で。それと、あなたのパパのことを考えてみて？ パパはヴァイオリンを弾く人で、いくつかヴァイオリンを持ってるけど、ヴァイオリン屋さんじゃないでしょう？ そういう人もいるのよ」トットちゃんは、「そうか」というと、ママと手をつないだ。

Chapter5 校長先生

トットちゃんとママが入っていくと、部屋の中にいた男の人が椅子から立ち上がった。その人は、頭の毛が薄くなっていて、前のほうの歯が抜けていて、顔の血色がよく、背はあまり高くないけど、肩や腕が、がっちりしていて、ヨレヨレの黒の三つ揃いを、キチンと着ていた。

トットちゃんは、急いで、お辞儀をしてから、元気よく聞いた。

「校長先生か、駅の人か、どっち？」

ママが、慌てて説明しよう、とするまえに、その人は笑いながら答えた。

「校長先生だよ」

トットちゃんは、とってもうれしそうに言った。

「よかった。じゃ、おねがい。私、この学校にいたい」

校長先生は、椅子をトットちゃんに勧めると、ママのほうを向いて言った。

「じゃ、僕は、これからトットちゃんと話がありますから、もう、お帰り下さって結構です」

ほんのちょっとの間、トットちゃんは、少し心細い気がしたけど、なんとなく、(この校長先生ならいいや)と思った。ママは、いさぎよく先生にいった。

「じゃ、よろしく、お願いします」

そして、ドアを閉めて出て行った。

校長先生は、トットちゃんの前に椅子を引っ張ってきて、とても近い位置に、向かい合わせに腰をかけると、こういった。

「さあ、何でも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」

「話したいこと!？」

(なにか聞かれて、お返事するのかな?) と思っていたトットちゃんは、「何でも話していい」と聞いて、ものすごくうれしくなって、すぐ話し始めた。順序も、話し方も、少しグチャグチャだったけど、一生懸命に話した。

今乗ってきた電車が速かったこと。

えき かいさつぐち 駅の改札口のおじさんに、おねが 願いしたけど、きつぷ 切符をくれなかったこと。

まえ い 前に行ってた学校の受け持ちの女の先生は、かお 顔がきれいだということ。

その学校には、つばめのす 巣があること。

いえ 家には、ロッキーという ちゃいろ 茶色の犬がいて“お手”と“ごめんくださいませ”と、ごはん あと 飯の後で、“まんぞく まんぞく 満足、満足”ができること。

ようちえん 幼稚園のとき、ハサミを口の中に入れて、チョキチョキやると、「した き 舌を切ります」と先生がいか 怒ったけど、なんかい 何回もやっちゃったってということ。

はな 涙が出てきたときは、いつまでも、ズルズルやってると、ママにしかられるから、なるべく早くかむこと。

パパは、うみ およ 海で泳ぐのがじょうず と 上手で、と こ 飛び込みだってで き 出来ること。

こういったことを、つぎ つぎ 次から次と、トットちゃんははな はな 話した。先生は、わら 笑ったり、うな ずいたり、「それから?」とかいったりしてくださったから、うれしくて、トットちゃんは、いつまでもはな はな 話した。でも、とうとう、はなし はなし 話がなくなった。トットちゃんは、口をつぐんで かんが 考えていると、先生はいった。

「もう、ないかい?」

トットちゃんは、これでおしまいにしてしまうのは、ざんねん おも 残念だと思った。

せっかく はなし 話 を、いっぱい聞いてもらう、いいチャンスなのに。

(なにか、はなし はなし 話は、ないかなあ……)

あたま 頭 の中が、いそが うご 忙しく動いた。と思ったら、「よかった!」。はなし はなし 話が見つかった。

それは、その日、トットちゃんが着てるき ようふく 洋服のことだった。たいがいのき ようふく 洋服は、ママがてせい つく 手製で作ってくれるのだけれど、きょう か 今日のは、買ったものだった。というのも、なにしろトットちゃんがゆうがた そと かえ 夕方、外から帰ってきたとき、どのき ようふく 洋服もビリビリで、ときには、ジャキジャキのときもあったし、どうしてそうなるのか、ママにもぜったい 絶対わからないのだけれど、白いもめん 木綿でゴム入りのパンツまで、ビリビリになっているのだから。トットちゃんのはなし はなし 話によると、よそのいえ にわ 家の庭をつきつけて垣根をもぐったり、はら てつじょうもう 原っぱの鉄条網をくぐるとき、「こんなになっちゃうんだ」ということなのだけれど、とにかく、そんなぐあい けっきょく け さ いえ 具合で、結局、今朝、家をでるとき、ママのてせい 手製の、しゃれたのは、どれもビリビリ

で、仕方なく、前に買ったのを着てきたのだった。それはワンピースで、エンジとグレーの細かいチェックで、布地はジャージだから、悪くはないけど、衿にしてある、花の刺繍の、赤い色が、ママは、「趣味が悪い」といていた。そのことを、トットちゃんは、思い出したのだった。だから、急いで椅子から降りると、衿を手で持ち上げて、先生のそばに行き、こういった。

「この衿ね、ママ、嫌いなんだって!」

それをいってしまったら、どう考えてみても、本当に、話しはもう無くなった。トットちゃんは（少し悲しい）と思った。トットちゃんが、そう思ったとき、先生が立ち上がった。そして、トットちゃんの頭に、大きく暖かい手を置くと、

「じゃ、これで、君は、この学校の生徒だよ」

そういった。……その時、トットちゃんは、なんだか、生まれて初めて、本当に好きな人にあったような気がした。だって、生まれてから今日まで、こんな長い時間、自分の話を聞いてくれた人は、いなかったんだもの。そして、その長い時間の間、一度だって、あくびをしたり、退屈そうにしないで、トットちゃんが話してるのと同じように、身を乗り出して、一生懸命、聞いてくれたんだもの。

トットちゃんは、このとき、まだ時計が読めなかったんだけど、それでも長い時間、と思ったくらいなんだから、もし読めたら、ビックリしたに違いない。そして、もっと先生に感謝したに違いない。というのは、トットちゃんとママが学校に着いたのが八時で、校長室で全部の話が終わって、トットちゃんが、この学校の生徒になった、と決まったとき、先生が懐中時計を見て、「ああ、お弁当の時間だな」といったから、つまり、たっぷり四時間、先生は、トットちゃんの話聞いてくれたことになるのだった。

後にも先にも、トットちゃんの話、こんなにちゃんと聞いてくれた大人は、いなかった。

それにしても、まだ小学校一年生になったばかりのトットちゃんが、四時間も、一人でしゃべるぶんの話があったことは、ママや、前の学校の先生が聞いたら、きっと、ビックリするに違いないことだった。

このとき、トットちゃんは、まだ退学のことはもちろん、周りの大人が、手こずっ

てることも、気がついていなかったし、もともと性格も陽気で、忘れっぽいタチだったから、無邪気に見えた。でも、トットちゃんの中のどこかに、なんとなく、疎外感のような、他の子供と違って、ひとりだけ、ちょっと、冷たい目で見られているようなものを、おぼろげには感じていた。それが、この校長先生となると、安心で、暖かくて、気持ちよかった。

（この人となら、ずーっと一緒にいてもいい）これが、校長先生、小林宗作氏に、初めて遭った日、トットちゃんを感じた、感想だった。そして、有難いことに、校長先生も、トットちゃんと、同じ感想を、その時、持っていたのだった。

Chapter6 お弁当

トットちゃんは、校 長 先生に連れられて、みんなが、お弁当を食べるところを、見に行くことになった。お昼だけは、電 車 でなく、「みんな、講 堂 に集まることになっている」と校 長 先生が教えてくれた。講 堂 はさっきトットちゃんが上がってきた石の階 段 の、突き当たりにあった。いってみると、生徒たちが、大騒ぎをしながら、机 と椅子を、講 堂 に、まーるく輪になるように、並べているところだった。隅っこで、それを見ていたトットちゃんは、校 長 先生の上着を引っ張って聞いた。

「他の生徒は、どこにいるの？」

校 長 先生は答えた。

「これで全部なんだよ」

「全部!？」

トットちゃんは、信じられない気がした。だって、前の学校の一クラスと同じくらいしか、いないんだもの。そうすると、

「学校中で、五十人くらいなの？」

校 長 先生は、「そうだ」といった。トットちゃんは、なにもかも、前の学校と違ってると思った。

みんなが着 席 すると、校 長 先生は、

「みんな、海のもの、山のもの、もって来たかい？」

と聞いた。

「はい」

みんな、それぞれの、お弁当の、ふたを取った。

「どれどれ」

校 長 先生は、机 で出来た円の中に入ると、ひとりずつ、お弁当をのぞきながら、歩いている。

生徒たちは、笑ったり、キイキイいったり、にぎやかだった。

「海のもの、山のもの、って、なんだろう」

トットちゃんは、おかしくなった。でも、とっても、とっても、この学校は変わっ
ていて、面白^{おもしろ}そう。お弁当^{べんとう}の時間^{じかん}が、こんなに、愉快^{ゆかい}で、楽^{たの}しいなんて、知らなかつ
た。トットちゃんは、明日^{あした}からは、自分^{じぶん}も、あの机^{つくえ}に座^{すわ}って、『海^{うみ}のものと、山^{やま}のもの』
の弁当^{べんとう}を、校^{こう}長^{ちょう}先生^{せんせい}に見てもらうんだ、と思うと、もう、嬉^{うれ}しさと、楽^{たの}しさで、胸^{むね}が
いっぱいになり、叫^{さけ}びそうになった。お弁当^{べんとう}を、のぞきこんでる校^{こう}長^{ちょう}先生^{せんせい}の肩^{かた}に、お
昼^{ひる}の光^{ひかり}が、やわらかく止^とまっていた。

Chapter7 今日から学校に行く

きのう、「^{きょう}今日から、^{きみ}君は、もう、この学校の^{せいと}生徒だよ」、そう校^{こう}長^{ちやう}先生^いに言われたトットちゃんにとって、こんなに次の日^{つぎ}が待ち^ま遠^どしい、ってことは、^{いま}今までになかった。だから、いつもなら朝^{あさ}、ママが叩^{たた}き起^おこしても、まだベッドの上でぼんやりしてることの多いトットちゃんが、この日ばかりは、誰^{だれ}からも起^おこされない^{まえ}前に、もうソックスまではいて、ランドセルを^せ背^お負^おって、みんなの起^おきるのを待^まっていた。

この家^{いえ}の中で、いちばん、きちんと時間^{じかん}を守るシェパードのロッキーは、トットちゃんの、いつもと違う行^{ちが}動^{こう}に、怪訝^{けげん}そうな目^むを向^むけながら、それでも、大きく伸^のびをする、トットちゃんにぴったりとくっついて、(何か始^{なに}まるらしい) こと^{はじ}を期^き待^{たい}した。

ママは大^{たい}変^{へん}だった。大^お忙^{いそ}しで、『海^{うみ}のものと山^{やま}のもの』のお弁^{べん}当^{とう}を作り、トットちゃんに朝^{あさ}ごはんを食^たべさせ、毛糸^{けいと}で編^あんだヒモを通^{とお}した、セルロイドの定期^{ていき}入^いれを、トットちゃん^{くび}の首^{くび}にかけた。これは定期^{ていき}を、なくさないためだった。パパは

「いい子でね」

と頭^{あたま}をモシャモシャにしたまま言^いった。

「もちろん!」

と、トットちゃん^いは言^いうと、玄関^{げんかん}で靴^{くつ}を履^はき、戸^とを開^あけると、クルリと家^{いえ}の中^むを向^むき、丁寧^{ていねい}にお辞儀^{じぎ}をして、こういった。

「みなさま、行^いってまいります」

見送^{みおく}りに立^たっていたママは、ちょっと涙^{なみだ}がでそうになった。それは、こんなに生き生きとしてお行儀^{ぎょうぎ}よく、素直^{すなお}で、楽^{たの}しそうにしてるトットちゃんが、つい、このあいだ、「退学^{たいがく}になった」、ということ^{おも}を思^だい出したからだった。(新^{あた}しい学校^{がっこう}で、うまくいくといい……) ママは心^{こころ}からそう祈^{いの}った。

ところが、次^{つぎ}の瞬^{しゅん}間^{かん}、ママは、飛^とび上^あがるほど驚^{おどろ}いた。というのは、トットちゃん^{くび}が、せっかくママが首^{くび}からかけた定期^{ていき}を、ロッキーの首^{くび}にかけているのを見たからだった。ママは、(一^い体^{たい}どうなるのだろう?) と思^{おも}ったけど、だまって、成^なり行^ゆきを見ることにした。トットちゃん^{くび}は、定期^{ていき}をロッキーの首^{くび}にかけると、しゃがんで、ロッキーに、

こういった。

「いい?この定期^{ていき}のヒモは、あんたに、合わないのよ」

確かに、ロッキーにはヒモが長く、定期^{ていき}は地面^{じめん}を引きずっていた。

「わかった? これは私^{わたし}の定期^{ていき}で、あんたのじゃないから、あんたは電車^{でんしゃ}に乗れないの。校長先生^{こうちょう}に聞いてみるけど、駅^{えき}の人にも。で『いい』っていったら、あんたも学校^こに来られるんだけど、どうかなあ」

ロッキーは、途中^{とちゅう}までは、耳をピンと立てて神妙^{しんみょう}に聞いていたけど、説明^{せつめい}の終わりのところで、定期^{ていき}を、ちょっと、なめてみて、それから、あくびをした。それでも、トットちゃんは、一生懸命^{いっしょうけんめい}に話し続けた。

「電車^{でんしゃ}の教室^{きょうしつ}は、動かないから、お教室^{きょうしつ}では、定期^{ていき}はいらないと思うんだ。とにかく、今日^{きょう}は持ってるのよ」

たしかにロッキーは、今まで、歩いて通う学校^{もん}の門まで、毎日、トットちゃんと一緒^{いっしょ}に行って、後は、一人で家^{いえ}に帰^{かえ}ってきていたから、今日^{きょう}も、そのつもりでいた。

トットちゃんは、定期^{ていき}をロッキーの首^{くび}からはずすと、大切^{たいせつ}そうに自分の首^{くび}にかけると、パパとママに、もう一度^{いちど}、『行ってまいりまーす』というと、今度^{こんど}は振り返らずに、ランドセルをカタカタいわせて走り出^{はし}した。ロッキーも、からだをのびのびさせながら、並^{なら}んで走り出^{はし}した。

駅^{えき}までの道^{みち}は、前^{まえ}の学校^いに行く道^{みち}と、ほとんど変わらなかった。だから、途中^{とちゅう}でトットちゃんは、顔見知り^{かおみし}の犬や猫^{ねこ}や、前^{まえ}の同級生^{どうきゅう}と、すれ違った。トットちゃんは、その度^{たび}に、「定期^{ていき}を見せて、驚^{おどろ}かせてやろうかな?」と思ったけど、(もし遅^{おそ}くなったら大変^{たいへん}だから、今日^{きょう}は、よそう……)と決めて、どんどん歩^{ある}いた。

駅^{えき}のところに来て、いつもなら左^{ひだり}に行くトットちゃんが、右^{みぎ}に曲^まがったので、可哀^{かわい}そうにロッキーは、とても心配^{しんぱい}そうに立ち止^たまって、キョロキョロした。トットちゃんは、改札口^{かいさつぐち}のところまで行^いったんだけど、戻^{もど}ってきて、まだ不思議^{ふしぎ}そうな顔^{かお}をしてるロッキーにいった。

「もう、前^{まえ}の学校^いには行かないのよ。新^{あた}しい学校^いに行くんだから」

それからトットちゃんは、ロッキーの顔^{かお}に、自分の顔^{かお}をくっつけ、ついでにロッキー

の耳の中の、においをかいだ。(いつもと同じくらい、くさいけれど、私^{わたし}には、いい、に
おい!) そう思うと顔を離^{おも}して、^{かお}「バイバイ」というと、定期^{ていき}を駅^{えき}の人に見せて、ちょっと
高^{たか}い駅^{えき}の階^{かい}段^{だん}を、登^{のぼ}り始^{はじ}めた。ロッキーは、小^こさい声^{こえ}で鳴^ないて、トットちゃん^{かいだん}が階^{かい}段^{だん}
を上^みがっていくのを、いつまでも見^み送^{おく}っていた。

Chapter8 電車の教室

トットちゃんが、きのう、校^{こう}長^{ちょう}先生^{せんせい}から教^{おし}えていただいた、自^じ分^{ぶん}の教^{きょう}室^{しつ}である、
電^{でん}車^{しゃ}のドアに手をかけたとき、まだ校^{こう}庭^{てい}には、誰^{だれ}の姿^{すがた}も見えなかった。今^{いま}と違^{ちが}って、
昔^{むかし}の電^{でん}車^{しゃ}は、外^{そと}から開^あくように、ドアに取^と手^てがついていた。両^{りょう}手^てで、その取^と手^てを持^もっ
て、右^{みぎ}に引^ひくと、ドアは、すぐ開^あいた。トットちゃんは、ドキドキしながら、そーっと、
首^{くび}を突^つっ込^こんで、中^なを見てみた。

「わあーい」

これなら、勉^{べん}強^{きやう}しながら、いつも旅^{りょ}行^{こう}をしるみたいじゃない。網^{あみ}柵^{だな}もあるし、
窓^{まど}も全^{ぜん}部^ぶ、そのままだし。違^{ちが}うところは、運^{うん}転^{てん}手^{しゅ}さんの席^{せき}のところに黒^{こく}板^{ばん}があるのと、
電^{でん}車^{しゃ}の長^{なが}い腰^{こしかけ}掛^{かけ}を、はずして、生^{せい}徒^と用^{よう}の机^{つくえ}と腰^{こしかけ}掛^{かけ}が進^{しん}行^{こう}方^{ほう}向^{こう}に向^むいて並^{なら}んでいる
のと、つり革^{かわ}が無^ないところだけ。後^{あと}は、天^{てん}井^{じょう}も床^{ゆか}も、全^{ぜん}部^ぶ、電^{でん}車^{しゃ}のままになっていた。
トットちゃんは靴^{くつ}を脱^ぬいで中^なに入り、誰^{だれ}でも腰^{こしかけ}掛^{かけ}ていたいくらい、気^き持^もちのいい椅子^{いす}
だった。トットちゃんは、うれしくて、(こんな気^きに入^いった学^{がく}校^{こう}は、絶^ぜ対^{たい}に、お休^{やす}みな
んかしないで、ずーっとくる) と、強^{つよ}く心^{こころ}に思^{おも}った。

それからトットちゃんは、窓^{まど}から外^{そと}を見ていた。すると、動^{うご}いていないはずの電^{でん}車^{しゃ}
なのに、校^{こう}庭^{てい}の花^{はな}や木^きが、少^{すこ}し風^{かぜ}に揺^ゆれているせいか、電^{でん}車^{しゃ}が走^{はし}っているような気^き持^も
ちになった。

「ああ、嬉^{うれ}しいなあー」

トットちゃんは、とうとう声^{こえ}に出^でして、そういった。それから、顔^{かお}をぺったりガラ
ス窓^{まど}にくっつけると、いつも、嬉^{うれ}しいとき、そうするように、デタラメ歌^{うた}を、うたいは
じめた。

とても うれし

うれし とても

どうしてかっていえば……

そこまで歌^{うた}ったとき、誰^{だれ}かが乗^のり込^こんできた。女^{おんな}の子^こだった。その子^こは、ノートと
筆^{ふで}箱^{ばこ}をランドセルから出^でして机^{つくえ}の上^{うへ}に置^おくと、背^せ伸^のびをし、網^{あみ}柵^{だな}にランドセルをの

せた。それから草履袋^{ぞうりぶくろ}も、のせた。トットちゃんは歌^{うた}をやめて、急い^{いそ}いで、まねをした。
つぎに、男の子^のが乗^のってきた。その子は、ドアのところから、バスケットボールのように、
ランドセルを、網^{あみ}柵^{だな}に投げ込んだ。網^{あみ}柵^{だな}の、網^{あみ}は、大きく波^{なみ}うつと、ランドセルを、投^な
げ出^だした。ランドセルは、床^{ゆか}に落^おちた。その男の子は、「失^し敗^{ぱい}!」という^しと、またもや、
同^{おな}じところから、網^{あみ}柵^{だな}めがけて、投^なげ込^こんだ。今^{こん}度は、うま^どく、おさ^{せい}まった。『成^{せい}功^{こう}!』
と、その子^さは叫^{さけ}ぶと、すぐ、「失^し敗^{ぱい}!」とい^いって、机^{つくえ}によ^のじ登^ぼると、網^{あみ}柵^{だな}のランドセル
を開^あけて、筆^ふ箱^{でばこ}やノートを出^でした。そうい^いうのを出^ですのを忘^{わす}れたから、失^し敗^{ぱい}だっ^たに
違^{ちが}い^がな^なかった。

こうして、九^{せい}人^との生^{でん}徒^{しゃ}が、トットちゃん^のの電^こ車^こに乗り込^こんできて、それが、トモエ
学^{がく}園^{えん}の、一^{ぜん}年^{いん}生^{いん}の全^{ぜん}員^{いん}だ^{いん}った。

そしてそれは、同^{おな}じ電^{でん}車^{しゃ}で旅^{たび}をする、仲^{なか}間^まだ^まった。

Chapter9 授業

お教室が本当の電車で、“かわってる”と思ったトットちゃんが、次に“かわってる”と思ったのは、教室で座る場所だった。前の学校は、誰かさんは、どの机、隣は誰、前は誰、と決まっていた。ところが、この学校は、どこでも、次の日の気分や都合で、毎日、好きなところに座っていいのだった。

そこでトットちゃんは、さんざん考え、そして見回したあげく、朝、トットちゃんの次に教室に入ってきた女の子の隣に座ることに決めた。なぜなら、この子が、長い耳をした兎の絵のついた、ジャンパー?スカートをはいていたからだった。

でも、なによりも“かわっていた”のは、この学校の、授業のやりかただった。普通の学校は、一時間目が国語なら、国語をやって、二時間目が算数なら、算数、という風に、時間割の通りの順番なのだけど、この学校は、まるっきり違っていた。何しろ、一時間目が始まるときに、その日、一日やる時間割の、全部の科目の問題を、女の先生が、黒板にいっぱい書きちゃって、「さあ、どれでも好きなから、始めてください」といったんだ。だから生徒は、国語であろうと、算数であろうと、自分の好きなから始めていっこうに、かまわないのだった。だから、作文の好きな子が、作文を書いていると、後ろでは、物理の好きな子が、アルコール?ランプに火をつけて、フラスコをブクブクやったり、何かを爆発させてる、なんていう光景は、どの教室でもみられることだった。この授業のやり方は、上級になるにしたがって、その子供の興味を持っているもの、興味の持ち方、物の考え方、そして、個性、といったものが、先生に、はっきり分かってくるから、先生にとって、生徒を知る上で、何よりの勉強法だった。また、生徒にとっても、好きな学科からやっていい、というのは、嬉しいことだったし、嫌いな学科にしても、学校が終わる時間までに、やればいいのか、何とか、やりくり出来た。従って、自習の形式が多く、いよいよ、分からなくなってくると、先生のところに聞きに行くか、自分の席に先生に来ていただいて、納得の行くまで、教えてもらう。そして、例題をもらって、また自習に入る。これは本当の勉強だった。だから、先生の話や説明を、ボンヤリ聞く、といった事は、無いにひとしかった。トット

ちゃん達、一年生は、まだ自習をするほどの勉強を始めていなかったけど、それでも、自分の好きな科目から勉強する、ということには、かわりなかった。カタカナを書く子、絵を描く子。本を読んでる子。中には、体操をしている子もいた。トットちゃんの隣の女の子は、もう、ひらがなが書けるらしく、ノートに写していた。トットちゃんは、何もかもが珍しくて、ワクワクしちゃって、みんなみたいに、すぐ勉強、というわけにはいかなかった。そんな時、トットちゃんの後ろの机の男の子が立ち上がって、黒板のほうに歩き出した。ノートを持って。黒板の横の机で、他の子に何かを教えている先生のところに行くらしかった。その子の歩くのを、後ろから見たトットちゃんは、それまでキョロキョロしてた動作をピタリと止めて、頬杖をつき、ジーっと、その子を見つめた。その子は、歩くとき、足を引きずっていた。とっても、歩くとき、体が揺れた。始めは、わざとしているのか、と思ったくらいだった。でも、やっぱり、わざとじゃなくて、そういう風になっちゃうんだ、と、しばらく見ていたトットちゃんにわかった。その子が、自分の机に戻ってくるのを、トットちゃんは、さっきの、頬杖のまま、見た。目と目が合った。その男の子は、トットちゃんを見ると、ニコリと笑った。トットちゃんも、あわてて、ニコリとした。その子が、後ろの席に座ると、——座るのも、他の子より、時間がかかったんだけど——トットちゃんは、クルリと振り向いて、その子に聞いた。「どうして、そんな風に歩くの?」その子は、優しい声で静かに答えた。とても利口そうな声だった。「僕、小児麻痺なんだ」「しょうにまひ?」トットちゃんは、それまで、そういう言葉を聞いたことが無かったから、聞き返した。その子は、少し小さい声でいった。「そう、小児麻痺。足だけじゃないよ。手だって……」そう、という、その子は、長い指と指が、くっついて、曲がったみたいになった手を出した。トットちゃんは、その左手を見ながら、「直らないの?」と心配になって聞いた。その子は、黙っていた。トットちゃんは、悪いことを聞いたのかと悲しくなった。すると、その子は、明るい声で言った。「僕の名前は、やまもとやすあき。君は?」トットちゃんは、その子が元気な声を出したので、嬉しくなって、大きな声で言った。「トットちゃんよ」こうして、山本泰明ちゃんと、トットちゃんのお友達づきあいが始まった。電車の中は、暖かい日差しで、暑いくらいだった。誰かが、窓を開けた。新しい春の風

が、電でん車しゃの中ちゅうを通とおり抜ぬけ、子こ供どもたちの髪かみの毛けが歌うたっているように、とびはねた。トッ
トちゃんの、トモエでだいの第一だいいち目は、こんな風ふうに始はじまったのだった。